











昨昨碎少民

層龍下里

中

早

谷

物

一

ち

此

約

て

い

つ

加

薇

よ

を

い

中

十

と

く

抄の草書計杖のよ  
ね又押さふ言は移り  
らふ一物としくよを動  
あふまゝあちおのり  
ねのこしとあましく  
お物さふあゝ一免のま  
さうまゝあましく仲間  
さうあ農法は殿の  
さうさうねん長中  
月をゆくゝ新とさ  
物さうのくゝさ  
よさねさうさうさ

さうひさねん田  
さうのみら節は  
さうさうあましく  
病方人さうさう  
ひさねんあましく  
さう月お物さう  
さうさうあましく  
了さうは宮懸  
さうさうあましく  
佛おねんさう  
さうさうあましく  
さう風さうさう

とらね情をさす  
斬りし瀧はえさうらうらと  
よふかき家樂を  
五腕の神を  
癒さすか階らさす又似具  
此いししうらうら  
いつれか幻はす  
たやももい  
ゆ

えぬれす  
雅のよももい  
え福と仲秋日

芝草志自書







向任業傳事記

概する所の向任の歴ももろくは  
藤土三信治曲舞平子能別郎よりして  
信成の通國を村乃山其のりあり  
之縁能はくは向任上高在り  
多しを業のうへ宮山社をいへも  
少くありこれも亦向任の名が  
け通る能きも能きありその  
事業も亦信成の被撰もこれ  
多し向任業の記も亦信成の  
向任も亦信成の記も亦信成の  
はうりよ信成の記も亦信成の  
多し向任業も亦信成の記も亦  
信成の記も亦信成の記も亦



常々大志を志す者  
あまき風流

青い〜  
あまき風流

名

善徳  
七

弘化三の年

心算の柳引すゝ急なう那  
善徳

心算の梅引すゝ急なう那  
梅屋

新徳の心算の梅引すゝ急なう那  
米友

新徳の心算の梅引すゝ急なう那  
色

月見の心算の梅引すゝ急なう那  
室

秋の心算の梅引すゝ急なう那  
友

新徳の心算の梅引すゝ急なう那  
色

心算の梅引すゝ急なう那  
室

心算の梅引すゝ急なう那  
友

心算の梅引すゝ急なう那  
色

ひらひらと舞うてきりぎりすの文殊菩薩

宝

月一輪清き月一輪清き月一輪清き

友

玉露の清き露の清き露の清き

宝

田の刈りたての穂の穂の穂の穂

宝

思ひ立きしころの思ひ立きしころ

友

来りしころの来りしころの来りしころ

宝

人乃れしころの人乃れしころ

宝

棹をたぐりしころの棹をたぐりしころ

友

標槍をたぐりしころの標槍をたぐりしころ

宝

御下りありしころの御下りありしころ

宝

昔年の植ゆきしころの昔年の植ゆきしころ

友

ふたふたふたふたふたふたふたふた

宝

藤をたぐりしころの藤をたぐりしころ

宝

ふたふたふたふたふたふたふたふた

友

御下りありしころの御下りありしころ

宝

ふたふたふたふたふたふたふたふた

友

はらへしころのはらへしころのはらへしころ

友

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

宝

水あそびしころの水あそびしころ

宝

柱乃をたぐりしころの柱乃をたぐりしころ

友

藤をたぐりしころの藤をたぐりしころ

宝

ふたふたふたふたふたふたふたふた

宝

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

友

昔年の昔年の昔年の昔年の昔年の昔年の昔年

宝

出代のさつりつるさつりつる

離乃名あつて悟りつる

全 本

咲いさるさつりつるさつりつる

了朗

全乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

善長

唯之乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

信長

深々乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

朗

自乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

色

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

全

初名我思ふよいさつりつる

朗

道乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

色

小乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

年

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

朗

全乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

色

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

手

片乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

朗

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

色

一乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

手

峰乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

朗

宅乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

色

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

手



物〜あまの老歌〜うり 末女

風〜雲の〜〜まき〜月秋 女

お〜は〜る〜白入鏡〜也 宝

イ〜云〜人懐懐〜也 女

橋乃〜元〜〜〜也 色

解〜居〜格〜む〜お〜れ〜り 宝

如〜能〜く〜ぬ〜る〜後〜り〜善 女

後〜能〜を〜と〜能〜也 色

念〜素〜の〜う〜ま〜く〜も〜ぬ〜れ〜り 女

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 女

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 宝

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 女

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 色

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 宝

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 女

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 色

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 宝

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 女

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 色

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 宝

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 女

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 色

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 宝

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 女

念〜ま〜の〜花〜月〜も〜も〜も〜ぬ〜れ〜り 色





路多野の地をゆくはるる昔も今も

ふるもついでに うりよふ表と

さうゆふ路ねてあゆむこころは

陸をけしき乃 舟りりたると

舟をさし人々皆星花の地を

舟に舟をさし 舟のついでに

舟をさしゆくはるる伊勢舟

舟をさしゆくはるる舟

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

舟をさしては路を 舟をさしては

乃ちあつちあつちとてあつちあつち

代々

長うあつちとてあつちあつち

巻(代)

策論のあつちとてあつちあつち

手

後中あつちとてあつちあつち

色

引き入あつちとてあつちあつち

手

折くあつちとてあつちあつち

色

折くあつちとてあつちあつち

手

奉公のあつちとてあつちあつち

色

近々あつちとてあつちあつち

手

毎夜あつちとてあつちあつち

色

松のあつちとてあつちあつち

、

もあつちとてあつちあつち

手

あつちとてあつちあつち

色

あつちとてあつちあつち

手

あつちとてあつちあつち

色

あつちとてあつちあつち

手

あつちとてあつちあつち

色

あつちとてあつちあつち

手

あつちとてあつちあつち

、

あつちとてあつちあつち

色

あつちとてあつちあつち

手

あつちとてあつちあつち

色

萬石の燈をとりての影 石の青

年

去るるあひく 難治の権あり

色

五のうもくくぬまを 吾のありし

年

小生ひくけんかきく ころりく

色

君とてたの 梅の折る 春のうもく

年

ちのけたさきく 月の喜んころり

、

海をたのむころりく ちと 下流のころり

色

急下り 川のぬく 川 魚

、

まの 船市を 終らぬ ぬ出

年

万里の 舟り 出まは けり 孫

色

船 舟り 舟をり 舟り 舟り 舟り

年

舟をり 舟り 舟り 舟り 舟り

色

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

年

舟の 舟の 舟の 舟の 舟の

色

水 舟をり 舟をり 舟をり 舟をり

治 梅 室

舟をり 舟をり 舟をり 舟をり

杜 野

舟をり 舟をり 舟をり 舟をり

舟 舟

舟をり 舟をり 舟をり 舟をり

舟 舟

舟をり 舟をり 舟をり 舟をり

舟 舟



たゞ撫り去りのまき入る家と那 曲淵

空柳をさくさく池のさく 孤柳

すくすくぬきやうきさくさくさく る江

さくさくさくさくさくさくさく 采石

月のかげさくさくさくさくさく 明石

月影のさくさくさくさくさく 成祇

白柳のさくさくさくさくさく 小船

紫尾のさくさくさくさくさく 柏馬

白狐のさくさくさくさくさく 淡路

さくさくさくさくさくさくさく 木立

さくさくさくさくさくさくさく 雪明

さくさくさくさくさくさくさく 桜名

桜名をさくさくさくさくさく 大翠

影影のさくさくさくさくさく 柏翠

さくさくさくさくさくさくさく 芳名

さくさくさくさくさくさくさく 如柳

柳のさくさくさくさくさくさく 枝月

何乃木のさくさくさくさくさく 杜陰

さくさくさくさくさくさくさく 多陽

地をさくさくさくさくさくさく 豊池

豊池のさくさくさくさくさくさく 徳年

さくさくさくさくさくさくさく 雲風

地をさくさくさくさくさくさく 雲風





あつたをまうけし 足もや 神 給 いかに 書 尻  
あつたの 年 廿一の 昔 あり あり くれ あつた 秋  
あつた とき あり ぬ 月 根 も 虫 あり あつた 天 抄

あつたをまうけし 足もや 神 給 いかに 書 尻

あつたの 年 廿一の 昔 あり あり くれ あつた 秋

あつた とき あり ぬ 月 根 も 虫 あり あつた 天 抄

あつたをまうけし 足もや 神 給 いかに 書 尻

あつたの 年 廿一の 昔 あり あり くれ あつた 秋

あつた とき あり ぬ 月 根 も 虫 あり あつた 天 抄

あつたをまうけし 足もや 神 給 いかに 書 尻

あつたの 年 廿一の 昔 あり あり くれ あつた 秋

あつた とき あり ぬ 月 根 も 虫 あり あつた 天 抄

あつたをまうけし 足もや 神 給 いかに 書 尻

あつたの 年 廿一の 昔 あり あり くれ あつた 秋

あつた とき あり ぬ 月 根 も 虫 あり あつた 天 抄

あつたをまうけし 足もや 神 給 いかに 書 尻

あつたの 年 廿一の 昔 あり あり くれ あつた 秋

あつた とき あり ぬ 月 根 も 虫 あり あつた 天 抄

あつたをまうけし 足もや 神 給 いかに 書 尻

あつたの 年 廿一の 昔 あり あり くれ あつた 秋

あつた とき あり ぬ 月 根 も 虫 あり あつた 天 抄

あつたをまうけし 足もや 神 給 いかに 書 尻

あつたの 年 廿一の 昔 あり あり くれ あつた 秋

あつた とき あり ぬ 月 根 も 虫 あり あつた 天 抄



流るる水も清くも濁くも 其の如く 相一

草木の生るるも 其の如く 草木

花の咲くも 其の如く 花

鳥の飛ぶも 其の如く 鳥

魚の泳ぐも 其の如く 魚

雲の浮くも 其の如く 雲

霧の降るも 其の如く 霧

雪の積るも 其の如く 雪

雨の降るも 其の如く 雨

雷の鳴るも 其の如く 雷

風の吹くも 其の如く 風

月の照るも 其の如く 月

星の輝くも 其の如く 星

朝の来るも 其の如く 朝

夕の来るも 其の如く 夕

年の経るも 其の如く 年

命の経るも 其の如く 命

世の経るも 其の如く 世

人の経るも 其の如く 人

物の経るも 其の如く 物

事の経るも 其の如く 事

理の経るも 其の如く 理

法の経るも 其の如く 法

道の経るも 其の如く 道

徳の経るも 其の如く 徳

業の経るも 其の如く 業

縁の経るも 其の如く 縁

因の経るも 其の如く 因

果の経るも 其の如く 果

草池

秋風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

秋の風も佳しきも 秋の風 水竹

於婦りて内外なるを流るる氣 秋の  
 船よ見えぬるうらみなる柳の姿 壺茶  
 松を束と居ふうらみなる柳の姿 子  
 柳の影に就て後より冬月の 南枝  
 柴積りの竹も物とされ梅の花 上車  
 末に地の人を道に柳の形 雅領  
 ちかき花ももみぬ竹のうらみなる 梅の  
 枝よあつた木も花の積りのうらみなる 金  
 株もあつた積りのうらみなる葉の氣 杜若  
 かわらぬ花ももみぬ竹のうらみなる 漢  
 ちか中の積りのうらみなる 素柳 古  
 柳のうらみなる船のうらみなる 祖々

黄道のうらみなる竹のうらみなる 五所  
 鶯のうらみなるうらみなるうらみなる 金代女  
 山のうらみなるうらみなる船のうらみなる 糸月  
 木のうらみなるうらみなるうらみなる 一止  
 うらみなるうらみなるうらみなるうらみなる 人  
 登るうらみなるうらみなるうらみなる 所  
 舟のうらみなるうらみなるうらみなる 左橋  
 うらみなるうらみなるうらみなるうらみなる 古草  
 うらみなるうらみなるうらみなるうらみなる 下  
 流のうらみなるうらみなるうらみなる 柳  
 流のうらみなるうらみなるうらみなる 柳

木下つ小舟ををるるは 雲の如  
美子 諸人の解乃とあはさる

上毛 孫島

風石

婦のしほえんうづりて 是るまじく  
在るは 藤の根は ちとまき 子規

上野 菅人

之柱

石を 根を 止はさる 水は 秋の月  
秋鶴 根を 止はさる 水は 秋の月

古別 本影

三年

山に 雲は 霞の 影を 照らす  
おきき の 月を 見たり 秋の月  
婦の しほえん うづりて 是るまじく

信乃 三影

去年

冬人

と なるは 水は 清く 濁る 色  
石を 止はさる 水は 秋の月

甲斐 新影

うづり

舟中 の 舟は 舟の 影を 照らす  
水は 清く 濁る 色  
石を 止はさる 水は 秋の月

上野 菅人

秋松

清平

松林 の 舟は 舟の 影を 照らす  
舟中 の 舟は 舟の 影を 照らす  
水は 清く 濁る 色  
石を 止はさる 水は 秋の月

上野 菅人

乙辰

五奥

桑山

水洋





降けりし雨も入らざる初冬これ

白鳥

松よりつたまふりつりし松花

松花

花散るるうららかなる信のうら

花散

る信のうららかなる信のうら

花散

花散るるうららかなる信のうら

花散

人の子も通らうしる来るる

花散

拍子もさるる月夜もあふれ

花散

水もさるるうららかなる

花散

水もさるるうららかなる

花散

水もさるるうららかなる

花散

水もさるるうららかなる

花散

水もさるるうららかなる

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

途へく火を切らり山を

花散

桂のつゆけり三月月さるれり

伯州 乙亥

梅のさるの一陰去る〜

出雲 百齡

ふしのさるい書方〜

信儀

古干やる階を〜

松屋

明のけり〜

紀州 采耶

今〜

法書

玉結〜

采牛

山〜

津路 生若

婦〜

急来

河原や階の書〜

澤地

梅のさる〜

希康

梅のゆき〜

南園

溜〜

山月

手枕のさる〜

女松

書〜

書局

何〜

た集

何〜

化友

何〜

書局

新〜

木長



たしあはるるなほのあけりたへ  
映門 伊藤

名もあはるるなほのあけりたへ  
多葉園 伊藤

初まのあけりたへ一徳利  
葵笠

気勢も近きうけりたへ  
急指

身もあはるるなほのあけりたへ  
紫人

松平もあはるるなほのあけりたへ  
古佐 碧うら

五とあはるるなほのあけりたへ  
元使

澄休也言のあけりたへ  
相 碧うら

中もあはるるなほのあけりたへ  
五漢

向の中もあはるるなほのあけりたへ  
其古 安

ふもあはるるなほのあけりたへ  
籠 籠

ちりもあはるるなほのあけりたへ  
石外

体もあはるるなほのあけりたへ  
斗出

外もあはるるなほのあけりたへ  
碧休

隠もあはるるなほのあけりたへ  
石女 ま

箱もあはるるなほのあけりたへ  
史故 礼

箱もあはるるなほのあけりたへ  
其月 ち

箱もあはるるなほのあけりたへ  
竹月 大

箱もあはるるなほのあけりたへ  
竹截 火

箱もあはるるなほのあけりたへ  
其月 は

箱もあはるるなほのあけりたへ  
松宿 上

秋もや冷めりし水乃泡 水乃泡

船もよきし静るし 静るし

生るるのさけりし 生るるの

孫婦もよきし 孫婦も

名もよきし 名も

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの

静るるの 静るるの



多岐のし虎門構つるまき乃秋

ちら 雲漢

月影登らんまのるるまのまのまの

雲漢

たのむくまのまのまの 牡丹こま

未知焉

もを引てまのまのまのまのまのまの

まのまの

らよまのまのまのまのまのまの

まのまの

はくまのまのまのまのまのまの

乙也

時ふまのまのまのまのまのまの

ちら 朱衣

相まのまのまのまのまのまの

東葉

川まのまのまのまのまのまの

まのまの

たのまのまのまのまのまのまの

まのまの

まのまのまのまのまのまの

甘の福

席まのまのまのまのまのまの

古推

柳まのまのまのまのまのまの

松五

七まのまのまのまのまのまの

まのまの

まのまのまのまのまのまの

者甫

地まのまのまのまのまのまの

乙也

まのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまの

月明

まのまのまのまのまのまの

まのまの

まのまのまのまのまのまの

和風

地まのまのまのまのまのまの

まのまの

まのまのまのまのまのまの

陰風

まのまのまのまのまのまの

陰風



冬に多し移の来る東也

ち 樹村

秋大月のけりし淋くまをるれ

如 陵

翻るけりし月をうけりて暮る那

多 濤

冬に多し移の来る東也

世 岐

冬に多し移の来る東也

後 朝

冬に多し移の来る東也

大 東

冬に多し移の来る東也

三 軍

冬に多し移の来る東也

朱 友

冬に多し移の来る東也

冬 五

冬に多し移の来る東也

冬 桃

冬に多し移の来る東也

冬 溪

冬に多し移の来る東也

有 甫

冬に多し移の来る東也

冬 小松

冬に多し移の来る東也

冬 御

冬に多し移の来る東也

後 朝

冬に多し移の来る東也

冬 文

冬に多し移の来る東也

後 始 風

冬に多し移の来る東也

大 白

冬に多し移の来る東也

冬 梅

冬に多し移の来る東也

世 岐

冬に多し移の来る東也

大 三

冬に多し移の来る東也

冬 友

冬に多し移の来る東也

冬 友



新修也 疾く急ぐなり ちとるを 疾く 宿る

牛馬のこころのまや 妻子 諸、 月を

福のぬれりたる 渚水 志 志

山を 那のまきより 那の月 世 世

那のこころのまきより 小まき 那 世 世

月を 那のまきより 小まき 世 世

山を 那のまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世

那のこころのまきより 小まき 世 世



五月廿二日 五重

五月廿三日 月舟

五月廿四日 月舟

五月廿五日 月舟

五月廿六日 月舟

五月廿七日 月舟

五月廿八日 月舟

五月廿九日 月舟

五月三十日 月舟

六月一日 月舟

六月二日 月舟

六月三日 月舟

五月廿二日 月舟

五月廿三日 月舟

五月廿四日 月舟

五月廿五日 月舟

五月廿六日 月舟

五月廿七日 月舟

五月廿八日 月舟

五月廿九日 月舟

五月三十日 月舟

六月一日 月舟

六月二日 月舟

六月三日 月舟

青峰の四葉の露は月夜露

室

わがえらふとあふ解らなく

逸

別荘より都の夜はの露さり

朝

あふたふのささる露のこころ

室

山を登りてけりあふ花乃さす

逸

結ぶささるこころ遠くする

朝

ささるわらわのあふ解らなく

室

あふあふのささるあふ

逸

あふあふのささるあふ

朝

あふあふのささるあふ

室

あふあふのささるあふ

逸

あふあふのささるあふ

朝

あふあふのささるあふ

室

あふあふのささるあふ

逸

あふあふのささるあふ

朝

あふあふのささるあふ

室

あふあふのささるあふ

逸

あふあふのささるあふ

朝

あふあふのささるあふ

室

あふあふのささるあふ

逸

あふあふのささるあふ

朝

あふあふのささるあふ

室

あふあふのささるあふ

逸

あふあふのささるあふ

朝

皆あふとけはは出らん酒干乃秋 雲々

霧も晴るる五月の月 雲々

白雲を色も橙半の歌のて 雲々

おききいなる酒のさうせり 雲々

馬のり歌のさうせり 雲々

いふれ歌のさうせり 雲々

大木の借ものさうせり 雲々

志歌のさうせり 雲々

気歌のさうせり 雲々

雲うねりて 雲々

おききいなる酒のさうせり 雲々

ねもさうせり 雲々

おききいなる酒のさうせり 雲々

樹のさうせり 雲々

毛のさうせり 雲々

泥のさうせり 雲々

おききいなる酒のさうせり 雲々

おききいなる酒のさうせり 雲々

十分は流るるを以て自後

高漢

凡道をぬらむ志を載る麻畑

高漢

庭をく懐く有り牛をえて

高漢

木をくれまうく実ふ物賣

高漢

流るる有り解すゆきく秋の風

高漢

別上りまう乃尔老流橋

高漢

捨るまうる葎のうごうたれ

高漢

室を揺る女のさきり喉旨

高漢

おれを身をこまう船る高知島

高漢

あうい糸着りやう川初霜

高漢

あうい糸着りやう川初霜

高漢

秋のはらうくく在風そのそ

高漢

はらういけいけいこゝる意は月

高漢

あういこゝる意は月

高漢

依心を揺る入あう有り

高漢

庭を揺る船のりやう

高漢

吹掃く心をこまう

高漢

そまうい糸着りやう

高漢

坐をたを志を載るあまをて風強

高漢

志を載る老あうのこけを白也

高漢

けりいこゝる意は月

高漢

わくわくしつたけのしつたけ 毛漢

今更なれどもよきわくわくのた 古権

自然なるおぼろけはあつたふた 今更

思ふことなきふた言けしつたけ 還古

古今のたけぬ織ふすたけ 世福

捨つた牛も羊もつくたけぬけ 柳風

郭よりぬぬうりつたけ 二月

帷子をもすくたけぬたけぬたけ 而之

二枚のたけぬたけぬたけ 親梅

深うしつたけぬたけぬたけ 月流

ふたつたけぬたけぬたけ 五拍

あつたたけぬたけぬたけぬたけ 今更

古きたけぬたけぬたけぬたけ 狐松

たけぬたけぬたけぬたけぬたけ 隔年

古きたけぬたけぬたけぬたけ 米老

古きたけぬたけぬたけぬたけ 意逸

湖のたけぬたけぬたけぬたけ 桓笠

一志のたけぬたけぬたけぬたけ 車受

たけぬたけぬたけぬたけぬたけ 意逸

明流のたけぬたけぬたけぬたけ 拾五

たけぬたけぬたけぬたけぬたけ 奇峰

たけぬたけぬたけぬたけぬたけ 意逸

つひ疎篋乃おち敷あまなり 妻如差

今かぬおのゝ思ひをお捨て 樹材

多かろのちかろの婦の煙むき 雲漢

潮も我あまのうらみも 雲漢

木柴た〜〜うけ仕込ち〜〜 此石

星のりんねの銀ふ〜〜の月 雲漢

時を〜〜く船を這 此陸

雲を〜〜のひきん 錦の中 如石

す〜〜の〜〜の字 糸枝

常盤さ〜〜の梅を〜〜のふり 藤山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 有甫

お〜〜のちの〜〜の〜〜の枝 蕙逸

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 藤山

ん中の言 飯前志〜〜の中 逸

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

〜〜の〜〜の〜〜の〜〜の 山

十名取ハ伊勢備うわへ高き後り

お樫下り松とね織房くぬ

小倉倉乃浴れと浴衣のきん

待世のつらきりきり〜お後

急ぎ〜ふのう〜ついでつこれ

はらう〜鯛籠〜弟のはらう〜

外敷も新祝ふ事あり〜其の如

おお松さうり〜さ〜さ〜

新づ〜湯気もた〜上供果〜

〜〜〜〜お〜お〜

あ〜〜〜お松さ〜お鼻の先

高野下橋を〜浴〜松牙

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

石河の松らら〜ん〜ん〜門

せ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

歯〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

た〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

任〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

は〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

秋〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

松〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

逸

Handwritten calligraphy in white ink on a black background. The text is arranged in four horizontal lines, reading from right to left. The characters are highly stylized and fluid, characteristic of cursive Japanese calligraphy (sōsho).

言わくは秋の暮るるに  
涼しくも清くも  
秋の自  
七多の結まぬ  
枯葉の形

47



雲の舟  
帆の  
乃  
旋  
乃  
乃

乃  
乃  
乃  
乃  
乃  
乃



梓子のきそしおのきふふふを  
彌くこき鹿の園にあき松の  
言のよまきおき松のふふふの  
くけくくく松の使子四方乃  
風調をきかひのふくくく業成り  
角くしふくをくく外一本松  
をまいたふふはあまふふ  
くくく真のくくく

平安 子仲有印

皇都深通寺町東八間  
蕉門御集冊摺物師 湖雲堂  
近江屋利助

